小田原俳句協会報

理事会だより（2・8）

一、立春青空句会（四日）について、当日は悪天候のため短冊吊るしは取止め吟行と句会を行った。なお短冊吊るしは観光協会で八日に行っていただいた。（事業部、会長　本号3頁）

二、梅まつり俳句大会について、大会の役割分担ほか準備状況を最終確認した。（事業部、総務部）

三、桜まつり俳句大会について、投句状況は出遅れ気味であり各グループで働きかけを行うよう確認。（事業部）当日の役割分担は梅まつりをベースに来月理事会で決定。（総務部）

四、三月十四日の臨時総会の招集通知を発信。定期総会資料は二月末までに提出のこと。（総務部）

五、風間秀泰さん（おほゐ）二月一日ご逝去されました。（享年七八歳）。

「俳句おだわら」10句抄（678号より）

芹澤常子　抄出

折帖の料紙透けたる冬の月　近藤　久江
日輪の揺らぐ川藻や冬ぬくし　佐宗　欣二
箔押しの皮の背表紙暖炉燃ゆ　庄司　下載
函嶺の高空統ぶる鷹一羽　齊藤　桂
名水の響を遠く冬櫻　植松テル子
白障子耳を澄ませば風の音　市川めぐみ
補聴器を外して長き夜となれり　長谷川きよ志
猟銃音近し日輪脈打てり　畠　梅乃
捨てる本読み返してる夜長かな　一ノ瀬茂代
槍投げの槍の切っ先寒波来る　杉山あけみ

田畑ヒロ子　抄出

鳶の輪の無音に離（さか）る今朝の冬　西賀　久實
茶が咲くと声の大きな薬売　百川　秀子
鬼の子の泣き出しさうな吹かれやう　守屋　まち
冬晴やアコーディオンの指踊る　下平　美子
冬日差もろとも轆轤まはしけり　池田　忠山
三文判少し曲がって押す小春　豊田　幸枝
補聴器を外して長き夜となれり　長谷川きよ志
飛び縄の久しくおかれ芝枯るる　須田　聡子
一陽来復風が煽るぞ四阡万　山本　すみ
女坂登りし先のみそおでん　岡田　典代

第60回小田原梅まつり俳句大会（二月十日）

事前投句に一五七名五〇九句、大会に六四名参加、UMECOに於て開催した。節目の六十回を記念してサプライズ賞を受付六十番の原田絹代さんに。

兼題入賞作品（兼題「梅、春待つ」

神奈川県知事賞

春待つや何度も背負ふランドセル　原田　絹代

小田原市観光協会会長賞

寡黙とは男の鎧梅真白　岡本　保

神静民報社賞

やはらかに息づく闇や梅ほのか　竹本もりえ

小田原俳句協会会長賞

梅月夜蔵方寸の明り取り　荒　理依子

以下俳句協会賞（二十位まで）

春待つや色鉛筆の二十色　木村　幸枝

新調の杖は花柄春を待つ　一ノ瀬茂代

制服のマネキンずらり春を待つ　高橋千代子

日溜りに声の集まる梅三分　中根登美子

玄関の隅に春待つスニーカー　若村　京子

折れてなほ咲く老梅の底力　小林　梢

球児等の素振百回春を待つ　日高　朝代

濃く淡く紡ぐ歳月梅真白　中根登美子

春待ちのまだ仮縫ひの山野かな　諸角　和彦

梅の香や心音聞えそうな空　中村　昌男

八十路にも眩しき未来梅咲けり　加藤かほる

春待つやスマホも山も充電中　長谷川昭放

梅日和酢を打って飯輝かす　諸角　和彦

梅の香や風に音符の生まれたる　近藤　久江

絵の具とく水の匂ひや春を待つ　大澤　秀子

名工の言葉すくなし梅かほる　奥村　ゑこ

選者特選賞

（小田原俳句協会名誉会長）佃　悦夫特選

春を待つ時計の中に鳩が飛ぶ　竹本もりえ

（小田原俳句協会顧問）大石雄介特選

羽広げ春を待つらん鷹ぽっぽ　佐藤　月下

（小田原俳句協会会長）池田忠山　特選

撫に耳当てて少年春を待つ　西賀　久實

（零俳句会代表）　岡本史郎特選

紅梅や姉の十九は挺身隊　中村三恵子

（鷹俳句会小田原代表）　村場十五特選

待春や白から並ぶ絵の具箱　岡本　保

（沈丁俳句会代表）　寶子山京子特選

電車より見し梅林の只中に　高橋　すゑ

当日題入賞作品（席題「土筆、春季雑詠）

小田原市長賞

春浅し海鳴りを聞く千枚田　北村　文江

小田原商工会議所会頭賞

なんとなく春のポケット裏返す　杉山あけみ

小田原俳句協会会長賞

土筆つみガリバーとなり立ち上がる　加藤かほる

（以下二十位まで）

山笑ふ三本だけの歯を磨く　奥村　ゑこ

川音に駆け出しさうなつくしんぼ　大澤　秀子

初音聞きけふは良き日と疑はず　陌間みどり

摘むたびに子の見せに来るつくしんぼ　肥後ちさこ

先生に土筆一本登園児　鈴木ひふみ

引鶴や雲流れゆく水の空　荒　理依子

一日一生ふんばれ揚雲雀　菅野　英余

春の雷金平糖を噛み砕く　川本　育子

春動く人智及ばぬところから　酒井　天敏

春大根包む「大谷」号外紙　長谷川きよ志

しんがりはをなご先生つくしんぼ　岡本　保

掘り起こす瓦礫に光るつくしんぼ　内田知江子

土筆原牛の匂ひの風少し　新井たか志

しんしんとセイジオザワに春の雪　寶子山京子

地震の地の復興遅し土筆の子　須田　聡子

雲雀あがり吾子の尿（いばり）のきらきらす　芹澤　常子

ものの芽や転べば人の駆け寄り来　村場　十五

立春青空句会（二月四日）

小田原城天守閣広場に十九名、短冊吊るしは好天時に観光協会にお願いすることに。（作品順不同）

春なれや北條家紋三つ鱗（うろこ）　佃　悦夫

春寒の能登空一面に応援歌　長谷川きよ志

足腰へ定年はなし春立つ日　石井千代子

梅香る歴史にｉｆがあるならば　小野　菊土

雨の立春猿の引っ越しがらんどう　北村　文江

柏槇に四百年目の春立てり　須田　聡子

春の雨骨董市の布袋かな　木村　幸枝

濠の面に春立つ木々の背筋かな　近藤　久江

赤松の幹のしなやか寒明くる　陌間みどり

小田原評定の席に加はり春寒し　村場　十五

下萌やこども園地の豆電車　田下　昌人

立春の日矢ひとすぢも雲を出（で）ず　池田　忠山

雨の立春華を添えたる骨董市　加藤かほる

福だんご売る本丸の寒の朝　山田　照子

梅ひらくデフレ夜明けのミナカ街　佐々木重満

城苑の猿の引越梅咲けり　米山　翠

春立ちてことばのように水流る　田畑ヒロ子

紅梅は手柄をたてたやうにゐる　寶子山京子

小田原城一の名妓や枝垂れ梅　武居裕美子

「新作8句」鑑賞（一月号より各一句を鑑賞）

ハンモック悪の限りを考える　　佃　悦夫

大空の中に揺られるハンモック。肉体が捨象され精神のみがゆらゆらとゆらめく感覚・・・。その在りようは無限の自由という錯覚をおぼえる。何物にも囚われない己だけの宇宙・・・。この宇宙は俺様が支配する。その不敵な思いの延長に日常では成しえないあらんかぎりの悪行を想像する。夢は膨らむ。膨らみ続けた夢も日の傾きとともに萎み始める。そして肉体が現実の地に足を下す。

ハンモックだけがいつまでも風に揺れている。

（伊藤道郎）

お降りのままにいちにち暮れにけり　　池田　忠山

三が日のひと日を、朝からのお降りとともに過ごした、という句意。どのように過ごしたかは一切触れていない。日本晴れなら言うことないが、雪もあれば、風の日も。どうであれ、三が日は何もかもが目出度く恵みである。一語一語噛みしめるように流れるように置かれた十七音。一日たりともおろそかにできぬ感慨がひしひしと。と同時に、なにか遊び心もうかがわれ嬉しい。初春を迎えた心の張りに裏打ちされた「初鏡」八句。そのすべてが眩しい。

（寶子山京子）

陶工の寡黙の背冬日差　　新井たか志

寡黙な陶工の背と冬の日差しを対比させ、冷たさと暖かさが静寂の中に交差する瞬間を捉えた作品です。よく耳をすますと、蹴ろくろを廻す音や時折のしわぶきの音が聞こえてきて、決して静止している空間ではなく、陶工が真摯な姿勢で仕事に取り組んでおり、その手から生まれる精緻な造形を冬の日差しが映し出していることがうかがえます。

十七音の中にこれだけの世界を言い留めた力量に、ただあこがれるばかりです。

（星　一義）

のど仏あたって曲がる冬の川　　大石　雄介

冬の川は真直ぐに流れていかなくてはならない。曲がることは罪悪なのである。だが自分の意志により曲がることもある。他人の理不尽な行為により曲がらざるを得なくなることもある。そんなときでも冬の川は気を取り直して真直ぐに流れようとする。のど仏とは、首の骨の一部であるまえに仏さまのことなのである。仏さまは自由である。仏さまの意志により冬の川は流れを変えることもある。仏さまは何をしてもあたたかく見守ってくれる。

（瀬戸正洋）

裏白や伸びた気がする生命線　石田加津子

年末年始よく働いてくれた手にクリームを塗りながらふと思う。あれ？生命線が伸びたような…。手相の事はわからないのでネットで見るとその人の行動や生き方、心持ちで変化する、とある。この句は未来に向けて前向きな作者の明るさが感じられて楽しい句になった。長寿の象徴として鏡餅に敷かれる裏白という地味だが目出度い季語との取り合わせで面白くまとめてある。

（池田令子）

齲歯抜いて瓦の鬼に呉れてやる　小島ノブヨシ

子供の頃、抜けた上の歯は縁の下、下の歯は屋根の上と母に教えられました。この句の場合、自然に抜けた歯ではなくて虫歯を抜く、虫歯を目の敵にしているが、不摂生の何ものでもない。だから屋根の瓦の鬼にあげましょうとなり、やや破れかぶれである。身体のどこも大事ですが、歯は咀嚼するところ、食育に通ずる。それに永久歯は生えかわってくれないし、虫歯を句材にするとは面白い発想である。歯がないと話にならない。

（小澤園子）

不治永患の宣告心の沈む夕障子　小林永以子

なんとも切ない宣告だ。受け入れるしかない。葛藤がびしびし伝わる。思い切って一句目に書き記すことによって、少しは気が晴れますよう。ストレートな思いを俳句という形で残そうとするとき、夕方と障子という言葉たちから力を貰い、定型に収める努力の中に俳句と向き合う楽しさも見える。

夕障子という景のなかに放りこんだ思いは、やわらかな光の中にある。

（大石和子）

買はれゆく城址の猿や十二月　鳥海　壮六

年の瀬の片付けや済ませる事も多く忙しない十二月。昭和時代より城址の広場で親しまれた動物園。だんだん縮小されて猿の檻だけが残されていた。その猿も移転先が決まり、この十二月でついに閉鎖となってしまった。大人も子供も猿の檻を眺めては、その行動や生態の面白さを楽しませてもらった。小田原の猿達が異郷の地でも元気でいてくれる事を願いつつ非常に寂しさを覚える十二月である。

（小澤純子）

俳句おだわら（2・19〆切り、到着順）

◆香雨・梅ごち（1・14）　忠山報

笑ひ雛ひとつ増やして初鏡　肥後ちさこ
冬天の青一枚に小田原城　関戸わよこ
福寿草日をいつぱいに母の部屋　青山　典子
寒晴や天守も鯱も誇らしげ　門松　鳳文
ころぶにも上手下手ありスキーヤー　吉田　百代
待春や小枝の先にひかるもの　吉田　康雄
寒晴や押絵のごとく城の松　陌間みどり
給油所に琴の流るるお正月　小澤　純子
口すすぐことも寒九の手水もて　池田　忠山

◆小田原鹿火屋（1・26）　久江報

醒めやらぬ家並無色の初景色　足立　和子
眉上げて行く大寒の向かひ風　川本　育子
平穏に白寿待つ日や福寿草　高橋　小糸
動かざる七色の鯉初景色　山﨑　悦子
杜甫の詩の墨の香溢る女正月　近藤　久江

◆こよろぎ（2・8）　つとむ報

元日の来客はまづ雀二羽　髙杉掘三朗
朝日浴び街の目覚めや寒に入る　板谷　雅泉
若菜摘む野にひとすじの水の音　植松テル子
胸中のもの吐き出して女正月　神山つとむ

◆山北（1・25）　由里子報

生れたる日付のつきし寒玉子　和田恵美子
振り分けるかな書の色紙初書展　尾崎　幸子
追ひ出せぬ鬼もをりけり追儺豆　星　一義
早梅や陽に向き変える椅子二つ　石田加津子
備長炭にのこる年輪冬銀河　竹下由里子

◆春野（1・21）　きよ志報

梅東風や羅漢百態泣き笑ひ　秋山　昇
水仙の香もゆらしゆく郵便夫　伊藤はる子
飛びきりの魚釣り上げし寒日和　内田知江子
ぼろ市の値を叩かれてゐる仏　尾﨑　一夫
寒晴や鼻孔耳孔とむず痒き　瀬戸　悠
日向ぼこ昨日おしやべり今日思案　二見　和江
鯛焼きの尾に生き残る余力あり　長谷川きよ志

◆みなみ（1・20）　かほる報

どんど火を取り囲みたる団子竿　加藤　健治
夕暮れは母となりたり葱きざむ　市川めぐみ
足るを知る齢となりぬ初鏡　豊田　幸枝
日向ぼこ又猫のきてまるくなる　斉藤　静

八十路など忘れ若菜を摘みにけり　小瀬村信子
施設より夫つれ帰るお元日　柳川　紀枝
どんどの炎あぶる我が身の裏表　加藤　富江
どんど燃え水神様は煙の中　加藤れい子
数式は無縁葉牡丹の渦美しき　加藤かほる

◆沈丁（2・1）　寶子山報

春めくや一万歩にはまだとほい　若村　京子
春めくや色褪せし文字道しるべ　柳澤ミサ子
春めくや露店冷やかしひとひと人　田中　惠一
春兆すうつの薬のすこし減り　河本　純子
春めくや海舟という嬰児にいないいないばあ　瀧本　敦子
地震の地に列車が通る梅真白　勝木　澄子
古傷を消したい朝の薄氷　菅野　英余
紅梅や読経激しく火渡りす　高井　幸子
春めくや身の箍すこしづつ緩び　片野　節子
街切れてふいに春めく大地かな　峯尾ユキエ
弁当の菜花つまんで笑顔なり　清水美代子
こんにちはに風の春めく立ち話　松下　俊之
借景の梅ほろほろと咲き匂ふ　武居裕美子
犬の仔の団子重なり春めきぬ　寶子山京子

◆青梅（2・14）　幸子報

梅日和孫と散歩の小半日　大塚　行人
白髪やほつほつ生きて梅一輪　湯本とし子
徒然になぞる筆先春燈　加藤まり子
白梅や列みだれずに登校児　久保寺トミ子
水仙や沢水引き込む山の寺　田中　幸子

◆おほゐ（2・14）　きよ子報

冴え返る夜星は皆んな主人公　中津川晴江
梅香る空のかなたに去りし人　二上　光子
飛ぶほどの梅にあらねど芳しく　横塚　昌平
里山を歩き尽くして涅槃西風　石井きよ子
復興のこまねくばかり冴え返る　石井千代子
狂人の握るボタンや冴え返る　小野　菊土
冴え返る雑木林の影長し　香川　花子
万物の目覚めの序奏二月光　加藤　春江
野仏が歩きだすよな梅日和　瀬戸とみ子
自販機のがらんと音の冴え返る　髙橋みどり
土の声水の声聞く木の芽晴　中根登美子
吸い込まれそうな青空梅真白　中村　昌男

◆実のり（2・15）　たか志報

豆撒の声小さくて大笑い　岩本ひさみ
梅かをる盲導犬のゆつくりと　杉本　久子

ほうれん草サラダに食す高層階　木村　幸枝
草々の待ちたるものに春の雨　新井たか志

◆零（2・15）　史郎報

欲しいもの少しずつ減る雛飾り　青木たけを
奥能登を照らし続けよシリウスよ　伊藤　道郎
ろう梅のかたわらに一脚の椅子　川合　昌子
辛抱の先に光明神迎え　佐藤　正子
春近し流れるような雲の縞　中村　裕子
登るほど春から晩冬山の旅　野川木一路
海消えて陸の漁船に積もる雪　岡本　史郎

◆鷹（2・3）　十五報

宝くじ買うて余寒の有楽町　青木　孝子
雲を割る初日や開手打つ音も　池田　令子
鵯の嘴あかき実ふふむ御慶かな　西賀　久實
富士見ゆる畑に大根抜きくれし　佐宗　欣二
底厚きロックグラスや春暖炉　須田　晴美
水底に動かぬ魚影寒に入る　中田　笑子
マシュマロの竿持たさるるとんどかな　百川　秀子
撫が水吸ひ上ぐる音春立ちぬ　山﨑美知子
年玉を渡し合ひたる夫婦かな　柏木　良花
落款に朱鮮らけき吉書かな　庄司　下載

頬赤き若き太刀持鏡餅　瀬戸　りん
語部のふつと沈黙炉火明　高橋久美子
元朝や空ひろやかに鴉啼く　中山智津子
じよんがらの勁き撥音雪女郎　齊藤　桂
川上に暮るる孤峰や松明けぬ　芹澤　常子
ホットワイン一人飲みたる二日かな　大木　敬子
身に付けし化学繊維や冬の夜　大島美恵子
三味線の師匠の三毛はかまど猫　田下　昌人
着ぶくれて締める雨戸や夕鴉　中根　和子
可惜夜のウッドデッキに春の雪　加藤　幾代
ふらここやシルバー割と学割と　高橋千代子
身代りに割られし土偶春の虹　守屋　まち
玻璃戸越し夜の近づく牡丹雪　米山　翠
春風に押される帰路や星一つ　來田　新子
定規当て読むトリセツや目借時　片野　秋子
蘖や赤牛の瞳の濡れゐたる　小林　環
雛壇や蔵に奏でるカルテット　下平　美子
ベビーカー寄せて夫婦やクロッカス　鳥海　壮六
水際の黙の小鷺や畦を焼く　古屋　德男
家族にも内規ありけり草の餅　村場　十五

◆たけのこ（2・14）　悦女報

植木屋の終りし後の柿坊主　三木　泰子
走り根の漲ぎる力歩道あげ　小宮　早苗
手入れなき老木の梅満開に　久津間百合子
前向きな心素直に黄水仙　徳田　公子
光跡は入江続きや冬鴎　宮崎　悦女

◆草むら（2・18）　重満報

春めくや歪みし町にボランティア　石井　秀稀
寝たれば紋白蝶の羽搏きす　佃　悦夫
忘れもの何かしたよう春三日月　佐々木重満

◆無所属

陽だまりのやうな夫亡き梅の風　小林永以子
金星を呑みこむ夜明龍馬の忌　畠　梅乃
新春や昔話に花咲かせ　田代　孝子
一年を清める雨の大晦日　一ノ瀬茂代
幕間のポップコーンとしわぶきと　出澤　洋子
ひとつかみ枯れ葉掛けをり福寿草　蓑宮　わか
梅月夜心図星に見透かされ　北村　文江
どんど榾山の音して崩れたり　田畑ヒロ子
初雪や早く帰りし送迎車　岩楯惠津子
「それいいね」師は褒め上手春うらら　神野美代子
しぐるるやかた寄り易きそば枕　山田　照子
愚図る子や菠薐草の軸真っ赤　須田　聡子
寒椿どこへ落ちるも我が人生　穂坂志げる
紅梅や器の字が遊んでいるような　大石　雄介
壮絶を越えて春野に立っている　大石　和子
貧弱な筋肉足長蜂の足　瀬戸　正洋
初日の出今年も嫁と丸くあれ　青木　勝子
鬱という字に似たるるや花粉症　小澤　園子
味付けは貧困といふ菜飯食む　大佐田うづき
木枯の奥へ遠吠えしたくなる　杉山あけみ
雨蛙いまにも泣きたさうな空　小島ノブヨシ
行列の出来る出店や梅香る　岡田　典代
泣いてゆく向ふに母や春の風　柴田　礼子

（二月号追加）

きのうまでの垢脱ぎ捨てて初日の出　大佐田うづき

理事会日程　3／14（冒頭に臨時総会）
4／11、4／25（定期総会）
毎月第2木曜日・けやき15時より

杉本　久子

傾けば傾くままに冬薔薇　　関戸わよ子

冬になると冷たい風が激しく吹き荒れる日が何日もある。そんな時、庭の薔薇は必死で我が身を守ろうと大きく揺れながら耐えている。何といじらしいことよ。この句の薔薇は冬の風に傾いてしまった。でも傾いたまま美しい花を咲かせたのだ。以前家の庭の薔薇も厳しい冬の寒さにも負けず美しい花を咲かせてくれたことがあった。この句は、あの日の感動を再び甦らせてくれました。

瀧本　敦子

空色は子の好きな色銀杏散る　　中田　笑子

空色を好きだという子はどんな子だろうか。可愛らしい花の色、赤やピンクを好きだという子とは少しばかり違う気がする。聞こえない声が聞こえ、人の痛みにも涙するような子だろうか。そんな想像をしてみた。

秋の空はどこまでも澄みきって何もかも受け入れてくれる色をしている。この子の好きな空色も秋の空色だろうか。銀杏の黄色が映える。

新会員を募集しています
お知り合いをお誘いください。

〈小田原俳句協会のご案内〉

1、小田原俳句協会報を毎月発行し「俳句おだわら」欄にひとり一句が掲載されます。昭和四十一年に創刊され一回の欠号もなく本号で六八〇号です。多くの俳句作品を読むことができます。

2、合同句集を五年毎に発行し、ひとり二十句掲載（令和元年に第十二集、令和六年度に第十三集を計画）

3、俳句大会、吟行会の実施
　○小田原梅まつり・秋季俳句大会等
　○立春句会　○秋の吟行会
　○小田原城天守閣前への会員俳句短冊の掲示

4、年会費　三千円（郵送の場合は別途郵送料）

入会の問い合わせ
○最寄りのグループ代表者等当協会会員
○総務部長（佐々木）○八〇ー一二四七ー八八七八

無所属会員の方に

毎月の投句は十九日必着です。
郵便事情を勘案され早目にお願いします。
（広報部）

小田原俳句協会　〒二五〇ー〇〇一二　小田原市本町二ー一三ー二　池田　忠山方